

大英博物館内の閲覧室。特徴的なドーム状の部屋であった。
〔イラストレイテッド・ロンドン・ニュース〕1857年5月9日号。



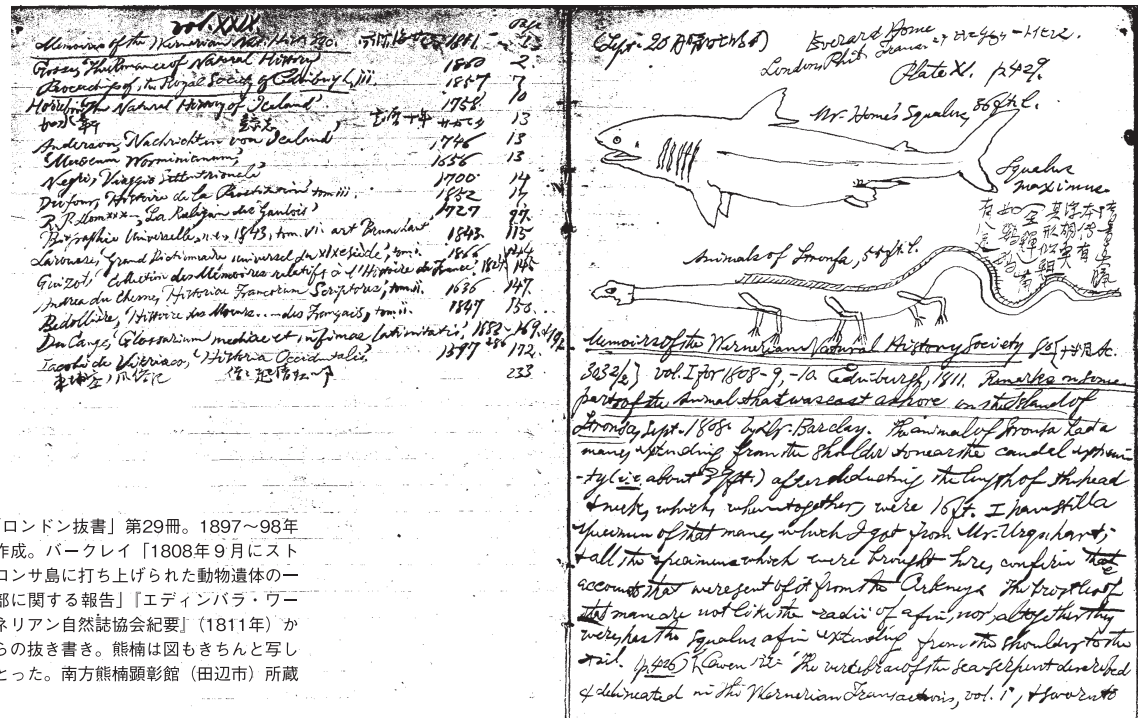
1901年に孫文と和歌山へ熊楠を訪ねたときの記念写真。
左から2人目が熊楠、中央が孫文。南方熊楠顕彰館（田辺市）所蔵

すむ」と日記にわざわざ記すほどの皆勤ぶりであり、しかもそれを何年間も継続した。「ロンドン抜書」を見ると、ノートに埋め尽くすようにびっしりと文字が詰め込まれ、熊楠の執念が伝わってくる。一説には、熊楠はもともと文字を書いた人間ではないかとすらいわれる。しかし、これが余人にまねができないかといえ、案外、そうでもなかったようだ。マルクスは同様に一八五〇年から三〇年以上も大英博物館の閲覧室に通ってノートをとり、それが『資本論』の材料となった。孫文も一八九六〜九七年の約八カ月間の在英中に、七〇回近く閲覧室

を訪れ、政治・外交から農業・鉱業に至るまで書物を漁り、ノートに写した。熊楠ともこの間に知り合い、「書写仲間」として厚い友情を築くことになる。こうした有名人以外にも、閲覧室には常連たちが無数にいた。一八八四年に出た『大英博物館——閲覧室と図書室』というガイドブックによれば、閲覧室内には全四一七席があり、女性専用席も設けられていた（男性用よりやや広いスペースがとられていた）。常連たちはいつも決まった席を使っており、受付で読みたい本を申しこむと、係員が閉架書庫内から席まで本を届

けてくれた。ロンドンには独学者たちがあふれていたのだ。それぞれが孤独な作業でも、周囲にはたくさん仲間がいたのであり、熊楠もさぞ居心地のよかったことだろう。書き写して、覚えてしまうこと。しかし、熊楠の独学のすごさは、そのさきにある。幼少時の熊楠が、近所家にあつた百科事典をまるまる覚えてしまい、帰宅してから正確に書き起こしたという「伝説」がある。熊楠の異様なまでの記憶力を示すエピソードとして有名だったが、一九九〇年代以降、実証的な熊楠研究が進むにつれて否定されることとなった。大坂の医師・寺島良安の著した『和漢三才図会』（全一〇五巻八一冊、一七二二年頃）という百科事典のだが、実際には友人宅から借り出しており、しかも三分の一ほど書写したにすぎない（南方熊楠顕彰館、南方熊楠記念館に残る資料からの推定）。近年はこうした「実証的」な研究が進み、熊楠の伝説が次々と否定されてきた。熊楠の記憶力も、伝えられてきたほどではないのだな、と筆者も寂しく感じていたのだが、最近になって

この続きを本誌でいっしょに



「ロンドン抜書」第29冊。1897〜98年作成。パークレイ「1808年9月にストロンザ島に打ち上げられた動物遺体の一部に関する報告」[エディンバラ・ワネリアン自然誌協会紀要]（1811年）からの抜き書き。熊楠は図もきちんと写しとった。南方熊楠顕彰館（田辺市）所蔵

独習者、南方熊楠の驚異の記憶力

志村真幸（比較文化史研究者）

大学などに属さずに研究をする、いわゆる「在野研究者」としてまっさきに挙げられるのが、熊野が生んだ知の巨人、南方熊楠だ。彼が残した膨大なメモや論考の解読から見てきた博覧強記の独学術とは？

在野の巨人として知られる南方熊楠（一八六七〜一九四一年）は、自分の好きな学問に一生を捧げた。とりくんだ分野は、変形菌（粘菌）、キノコ、シダ植物、淡水藻、民俗学、説話研究、比較宗教学、心霊科学と幅広く、なおかついずれにおいても膨大な学識を誇った。あまりにもバラバラな領域で、勉強にもさぞ苦労したのではないかと思われるが、熊楠のとった方法論には共通するものがあつた。熊楠にとって「字ぶ」とは、すなわち記憶することだったのである。熊楠には、「抜書」と呼ばれる膨大なノート類がある。東京〜アメリカ〜イギリス時代の「課余随筆」は一〇冊、イギリスでつくった「ロンドン抜書」は五二冊、帰国後の「田辺抜書」は六一冊にのぼる。書物や雑誌記事を筆写したもので、ほとんど一言一句欠かさず写しとっているのが特徴だ。『田辺通信』の「平家蟹の話」（一九一三年）で、「十五、六世紀までは西洋でも古書を読むを唯一の学問とし、書籍にないことは知るに足らずとした」と記しているとおろ、熊楠は書物を厚く信頼していた。一八九二年から暮らしたロンドンでは、大英博物館内にあつた閲覧室（現在の大英図書館）に通いつめ、開館から閉館までひたすら筆写に励んだ。たまに行かない日があると、「博物館や